

「兵庫まちづくりプラットフォーム」 ワークショップ in 五色 記録



月 日 : 2003 年 11 月 8 日(土)
場 所 : ウェルネスパーク五色
公共の宿「浜千鳥」

「兵庫まちづくりプラットフォーム」 ワークショップ in 五色 記録



日 時：2003年11月8日(土) 13:32～16:25

場 所：ウェルネスパーク五色 公共の宿「浜千鳥」

参加者：一般参加者 51名(ギャラリー23名を含む)

五色町役場スタッフ 5名、プラットフォームスタッフ 15名(専門家を含む)

総合司会を倉内氏(五色町健康福祉課課長)、ワークショップ進行を野崎氏(NPO 法人神戸まちづくり研究所)、各グループのファシリテーターを松原氏[1G]・田中氏[2G]・中川氏[3G]・山本氏[4G]が務めた。専門家として、1G:奥井氏(コープラン)、2G:フंक氏(広島大学)・野崎氏、3G:山口氏(ひょうご・まち・くらし研究所)、4G:上田氏(神戸協同病院)・山地氏(神戸大学大学院)に加わっていただいた。

1. 開会

(1) 開会宣言(倉内氏)

ただいまから、「兵庫まちづくりプラットフォーム」ワークショップ in 五色 と題して、五色町で進めている「共生の里」を考えるワークショップを開催します。「共生の里」構想の理解を深めていただき、これまで取り組んできた地域の包括的ケアと成果と課題を再確認し、今後の展望についても住民と専門家の方々に共に考えていただくという狙いがあります。

(2) 主催者挨拶(小森氏:ひょうごボランティアプラザ所長)

このワークショップは、ひょうごボランティアプラザの「行政・NPO 協働事業助成」を受けた「兵庫まちづくりプラットフォーム」事業の第2年度事業です。NPO 法人神戸まちづくり研究所が提案し、兵庫県県土整備部まちづくり局と協働で行っています。具体的には、各地域の緊急の課題や全県的な課題を、幅広い立場から検討しPRに勤めるということで、今年3月には但馬と北播磨で、4月には丹波でワークショップを開催しました。淡路でも適当なテーマがあれば開催したいと考えていましたところ、この五色町、兵庫県下で大変先進的な健康福祉のまちづくりをやられているということで決めさせていただきました。以前からご指導いただいていた来馬町長に相談したところ、松浦先生と相談して盛り上げてほしいということで喜んでお引き受けしました。皆さんのお知恵をできるだけ地引網のように集めようというのが今日の目論見ですので、ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

(3) 町長挨拶(来馬氏:五色町町長)

五色町は伝統的に健康福祉のまちということでは、先達の方々のおかげで知名度も上がっているところですが、更にそれを高めるために、そして住民のニーズの高まりの中で、「共生の里」構想という提案がされました。それを私が引き継ぎ、更に高めるために、但馬では「但馬長寿の郷」、中央部では「小野長寿の里」のプロジェクトが動こうとしている中で、淡路全体を背負ってたつ長寿の里に育て上げたいという思いがあります。単なる五色町の施設ではなく、淡路中に、そして近隣の神戸なりにも及ぶような内容のものとしてこの場所が輝けるようにというビジョンを持っています。そういう視点で、皆様方の思いを膨らませていただき、遠路お越しいただいた専門家のお知恵をいただいて、内容を充実させるべく議論をよろしくお願いいたします。

(4) 進行説明(野崎氏)

今日はワークショップという方法で皆さんの意見を集めようと思っています。プログラムの最初は、松浦先生から「共生の里」構想がどういったものかの報告をしていただきます。その上で、皆さんに 4

つのテーマ(「共生の里の施設を考える」「地域の参画を考える」「発信拠点性を考える」「多様な保健・医療・福祉環境を考える」)に別れて一緒に考えていただいた後、グループごとでまとめて、住民からお一人と専門家の方から報告をいただき、最終的に全体のまとめをします。

基調報告に入る前にリラックスするためのアイスブレイクとして旗揚げアンケートを行います。

(下記の表は、「共生の里」構想について参加者がどれくらい知っているかのアンケート結果です。

参加者が自分に当てはまる番号の旗を揚げました。)

私は、「共生の里」構想について、			
1 番	たいへんよく知っている	9名	
2 番	少し知っている	17名	
3 番	ほとんど知らない	8名	
4 番	全く知らなかった	3名	
5 番	その他	1名	色んな人々の思いについて、まだ分からない所がある

圧倒的に何らかの形で知っているという方が多く、かなりの理解と関心を持たれています。

2. 基調報告(松浦氏:五色町保健・医療・福祉統括理事)

前半は五色町においての地域包括ケアについて、後半は「共生の里」についてお話しします。

五色町における保健・医療・福祉の特徴

五色町の保健・医療・福祉の特徴は、一つは広義の「健康づくり」の挑戦してきたことだと言えます。広義とは、単に病気や障害を予防することだけではなく、病気や障害があり自分で対処することができなくても、地域社会の中で支援を受けながら生きがいを持って生きていくことができる人生であれば健康ではないかということです。そのためには、包括的地域ケア、保健・医療・福祉の分野が一緒になって総合的サービスを提供していかなければいけない。その基盤づくりのために、どこを行政が公的責任を持ってやらなければいけないのか、どこを住民が主体的にやらないといけないのか、行政と住民と一緒に協働して目標に向けて努力してきたわけです。今日の共生環境の整備もその一貫です。介護保険は全国格差が無いという公的サービスですが、それでいいということではなく、地域社会の中で制度を活用しながら最大限のものをつくりあげていこうとするのが地域に住んでいる者の務めだと思うのです。

包括的地域ケアとは

一つの病気が出てきますと、特に高齢になり病気になると、その病気だけではなくそこから機能障害が派生してきます。その機能障害が、今まで当たり前のように行われてきた日常生活の生活障害を引き起こしてきます。同時に地域での社会活動ができなくなるといった社会との関係障害が起きてきます。そういう複合した問題を抱えて地域で生きている人たちに対して、医療の分野だとか福祉の分野だとか、バラバラにアプローチするのではなく、保健・福祉・医療の分野が連携して総合的なケアを推進していく基盤をつくっていくべきです。そして住民が誕生して生涯を終えていくまで、乳幼児期の問題、学歴期の問題、働き盛りの問題、高齢期の問題があります。そのステージごとの重要な課題について取り組んでいくような、全てのライフステージを包括したケア体制を組んでいこうとしたわけです。

包括的地域ケアのための Strategy

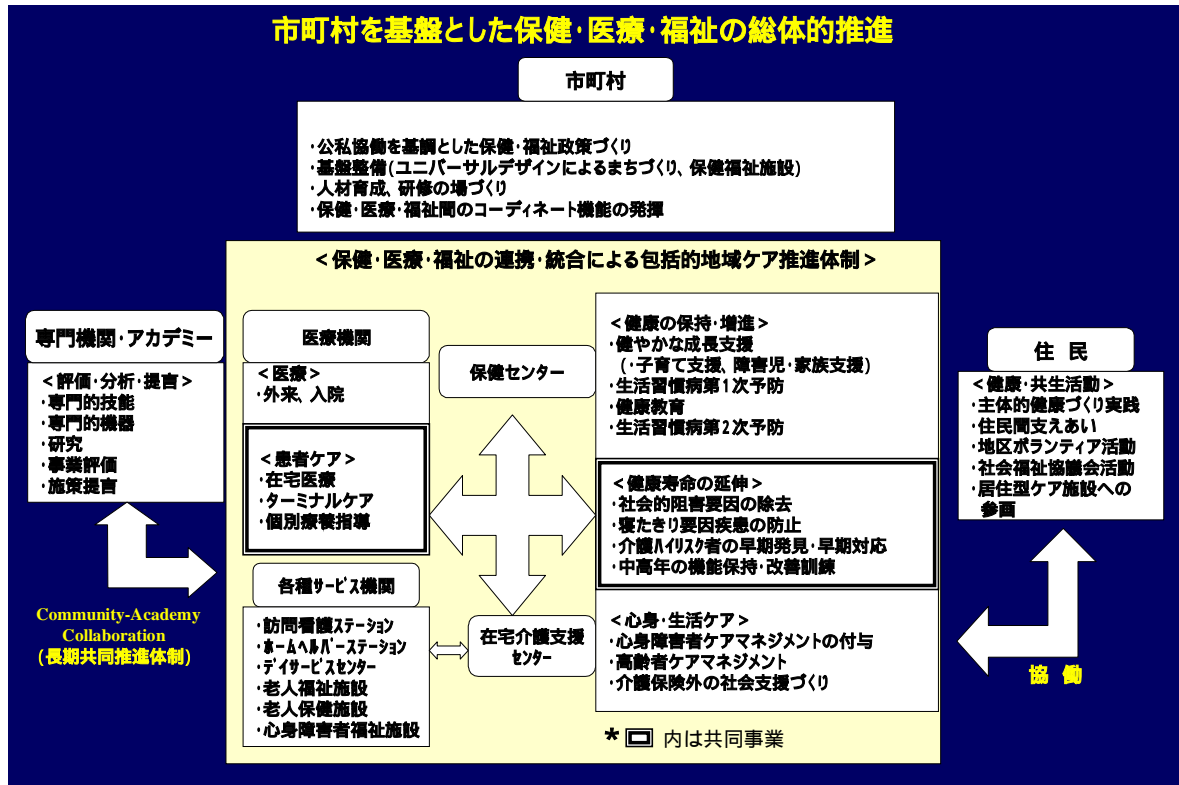
Strategy は戦略ですが、包括的地域ケアのために保健・福祉・医療の行政一本化と機能統合をやりました。要するに健康課と福祉課とバラバラだったものを健康福祉課と一つにしたのです。そのための現場サービススタッフが一堂に会して、一体的に活動できる体制にし、健康福祉総合センターと称する保健福祉の複合サービス拠点と、国保診療施設を配備しました。五色町の特徴として、全ての健康福祉サービスが町直営によるものだということがあります。

事業推進手法として、保健・医療・福祉部門の連携によって事業計画を策定しています。もちろん事

業にあたっては、各部門の連携・共同によって推進し、特に高齢者ケアに関しては、全サービス部門の代表者が週1回集まり、一人一人の複合ケアプランを作成しているのです。また昭和60年当時から、健康づくりに関して同じ課題を抱えた人たちのグループがたくさん誕生し、我々は専門職として支援することをやってきました。各種学習会も開設されています。「健康寿命」延伸のための機能改善活動の普及や効果的事業の推進のために、大学などの専門機関と我々現場が一緒になって推進していくことを重視しました。

市町村を基盤とした保健・医療・福祉の総体的推進

下図は、市町村を基盤とした保健・福祉の総体的な推進というものを図示したものです。

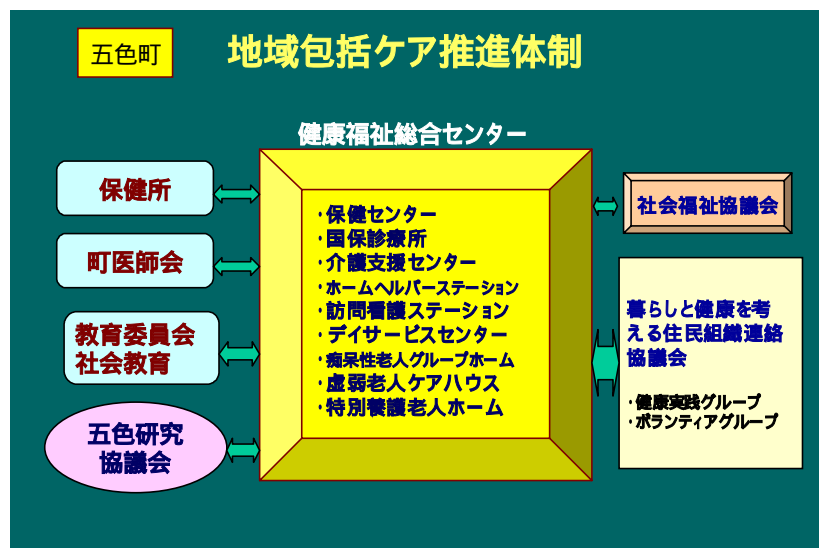


地域包括ケア推進体制
五色町には、健康福祉総合センターに各種サービス部門があり、住民組織と連携しながらやっています。

「健康なまち」とは
病気・障害・悩みなどが無い状態を目標とするだけでなく、それらがあり、自分自身で対処できなくても、心身のケアや生活支援により「生きていて良かった」と思える地域をめざして、行政・住民・専門職が協働して仕組みづくりをしていく姿そのものが「健康なまち」とであると我々は捉えています。

「健康なまち」づくりの実践課題

大きく分けて「健やかな成長」「早世の防止」「健康寿命の延伸」「生きがいの醸成」の4つの実践課題



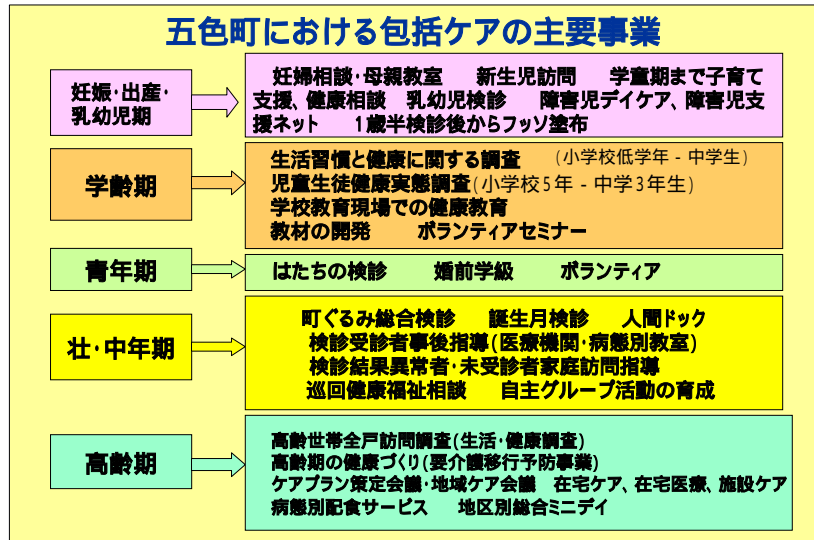
題があります。このために、子育て支援にどう取り組んでいくのか、生活習慣病対策をどうするのか、要介護移行予防対策をどうするのか、共生環境をどう整備していくのかということです。その仕組みとして、今日は細かくお話できませんが、学齢期の健康教育、小中学校の児童・生徒の生活習慣病予防対策が20年にわたって続けられてきました。第2次予防対策としての住民健康診断や、健康の自己管理能力の向上のための各種健康教育や自主活動グループの育成などが行われました。

五色町における包括ケアの主要事業

妊娠・出産・乳幼児期、学齢期、青年期、壮・中年期、高齢期のライフステージごとにケアの課題をまとめて重点的にやってきました。

五色町における住民の健康学習の概要

健康づくりにしても共生活動にしても、すべからく住民自身の問題です。住民自身が自分たちの問題として活動



できるように、いろいろなテーマで学習して実践していこうということが、これまで各種のレベルで行われてきました。乳幼児期には様々な教室がありますし、学齢期は生活習慣病予防対策としての小中学校での健康教育やボランティアセミナーなどが行われています。壮・中年期には自主的な健康グループが学習・実践をしており、高齢期の健康づくり教室が各地で行われています。

「保険料負担の低減」と「ケアの充実」の達成

介護保険制度の開始時に、五色町の介護保険事業計画を策定するにあたり、「介護保険料の低減」と「ケアの充実」の両方を達成していくという目標を立てました。これは、介護保険制度の中では、ケアの充実には保険料を上げますし、保険料を下げると充実したケアができないということになるのですが、一見矛盾した目標に思われるでしょうか。しかし、矛盾するという考え方は、高齢者ケアは介護保険制度の枠の中でやればよいという発想からくるものです。私たちは、制度を活用しながら、そこへ地域の努力をかましていくことが必要だと考えました。そのためには、介護保険の世話にならない高齢者をたくさん作りだしていく「健康寿命」延伸への挑戦が必要です。これは、高齢期になってあわててやっても駄目で、生活習慣病の早期予防や壮・中年期の健康管理を充実させて、健康状態をコントロールできる住民が育たないといけません。また要介護になりそうな人を早く見つけて、そうさせないような仕組みをつくらないといけません。もう一つの柱が、公私協働による新たな公共づくりです。これまでは行政が事業を打ち出し住民に従ってもらおうという手法でしたが、やはり暮らしや健康・福祉という問題は、住民と一緒に動いていくという新たな公共づくりを目指していかなければなりません。そのためには住民の介護学習や個人ボランティアネットの形成、そしてインフォーマルサポートを含めたケアプランを考えていく必要があります。

要介護移行予防をめざした高齢期の健康づくり

65歳以上の全世帯に対して毎年健康生活調査をやっていきます。その中で、寝たきりになりそうなハイリスク者を抽出して、保健士が訪ねて確認していく作業が行われています。必要な様々なケアに早くつなげていくということです。第2点は、毎週各地区で寝たきり予防を防ぐような教室が開かれ、聴力や視力や歩行分析などの検診や学習が行われているわけです。

兵庫県下全市町村(88)における五色町の順序

五色町は老人保健の入院費(1件あたりと1人あたり)が兵庫県下全市町村で最下位です。注目していただきたいのは、訪問看護・訪問リハビリテーション・デイケアなど在宅を訪問する活動は全て県下で10本の指の中に入るといことです。居宅療養管理件数(在宅医療)は第3位。在宅で支えるということは県下トップクラスで、高齢者の入院費用はかなり安くついています。

閉じこもりと要介護移行

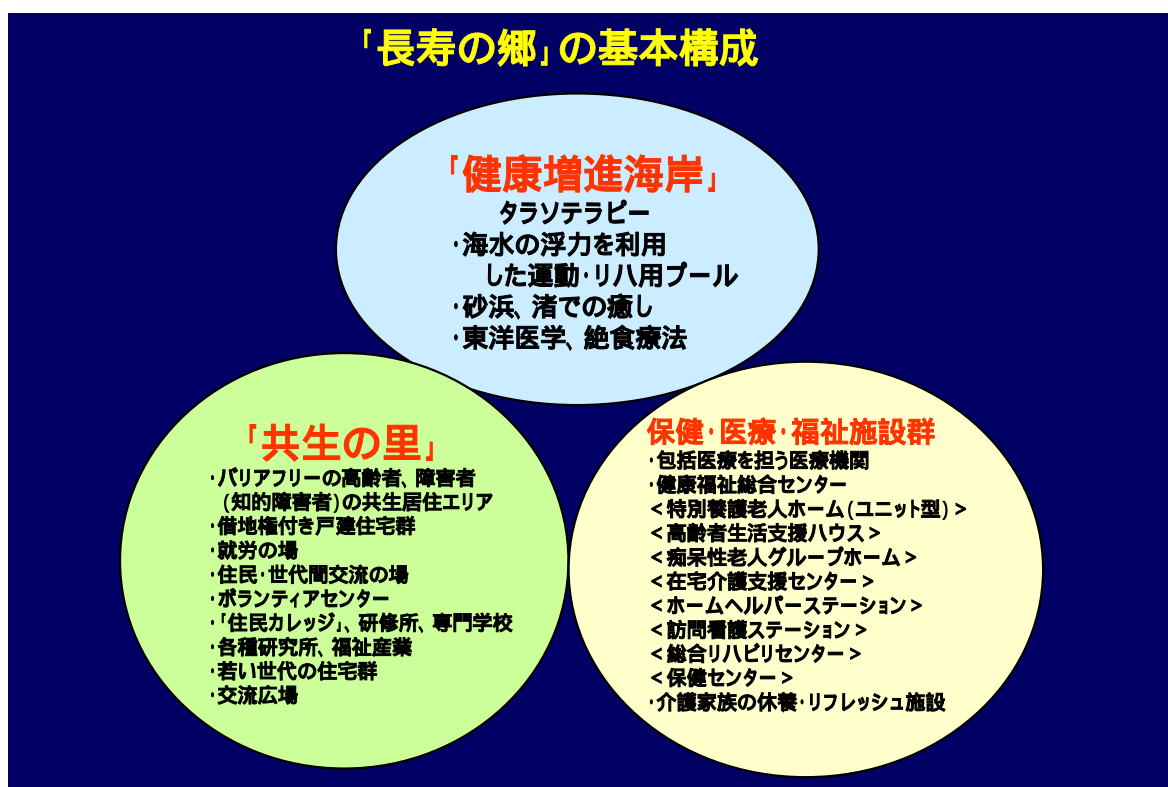
2年半の追跡の結果ですが、閉じこもりでない人たちの約89%はまだ元気ですが、閉じこもっている人たちは約66.2%しか自立が保てていません。30数%が要介護状態に移行しており、大きなテーマになっています。

淡路島における「長寿の郷」(仮称)の意義

長寿の郷はいろいろなところにありますが、淡路全島を視野に入れた淡路の拠点をつくっていかうということです。なぜ必要かと言いますと、もちろん生活習慣病予防が第一で、健康寿命を伸ばしていき元気な高齢者を増加させていこうということです。そして海と緑の癒しの島としての淡路の生活を確立するために海岸線を活用したタラソセラピー、機能訓練もできるようなプールや海水を利用した温水プールも併設したようなものをやっていく。そして老後に至るまで安心して居住できるコミュニティを実現していくために「共生の里」を建設し、そして既存の保健医療施設をもっと充実していこうということです。

「長寿の郷」の基本構想

「長寿の郷」は県が但馬などで推進している名称を使わせていただいています。健康増進海岸としての健康増進の分野、「共生の里」、「保健・医療・福祉施設群」を一体的に整備していこうということです。



地域で支えあい地域で暮らす「共生の里」

「共生の里」という名前だけが一人歩きしており、それぞれ考えているイメージはまだ多様です。今日は今からの説明にこだわらずに皆さんの思いを言っていただければと思います。「共生の里」が必要な背景は何かと言うと、現在五色町に住んでいる多くの高齢者は、できるだけ家で生活し続けたいが不安

だ、施設に入れば安心だが入りたくないという思いを持って生活されています。施設待ちの方がどんどん増えてきて、特別養護老人ホームを予約されている方もたくさんいます。日中誰も介護する人がいないとか、高齢者が高齢者を介護しているような状態があります。最近の政府答申で、介護保険制度のもとでも在宅ケアでは高齢者の生活は丸ごと支援できていないという指摘が行われています。今は「在宅か施設か」の二者択一的な選択肢しかありませんが、それでは高齢者の健康寿命は延ばしてはいけません。家にいれなくても、施設に入らずに地域で支援を受けながら生活していけるような仕組みや住まい方を、地域の中につくりだしていかないとはいけません。それが「地域づくりの原点」だろうと思います。このようなあり方は、高齢者介護研究会の中でも言われ始めていますので、数年経てば政策誘導してくるだろうと思います。

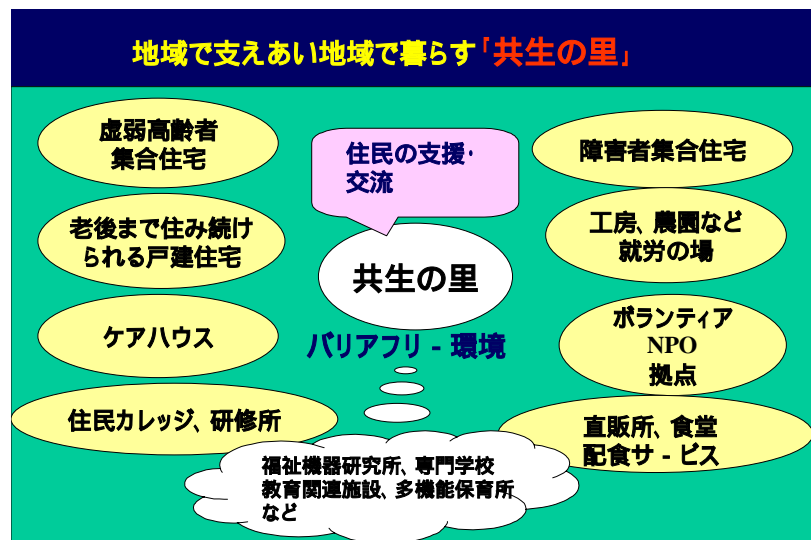
「共生の里」とは

「共生の里」とは、自分の家では生活が困難となった人でも、さまざまなバリア(生活の障害となるもの)を無くし、生活しやすいように工夫された高齢者・心身障害者用居住地域のことで、ケアが必要な場合は在宅ケア専門職やボランティアによる生活支援を受けながら、できるだけ施設に入らないで地域生活を送ることができることを目指しています。そこでは、自分の生きたいように生きていくことができる仕掛けをしていきます。必要に応じて在宅・施設ケアや医療を受けることができるし、様々な人たちとの地域交流の中で生活の喜びが味わえます。障害があっても就労意欲が満たされ、自分の家にも時々帰ってみたいことができます。そういう住環境のイメージです。

地域で支えあい地域で暮らす「共生の里」

基本的なコンセプトとしては、たとえ心身に障害があっても地域社会の中で共に支えあいながら老後に至るまで安心して住みつづけることができる「地域」づくりです。大切なことは、「共生の里」づくりの目的は、単に限られた場所に住みやすい住環境をつくることだけでなく、そこを発信源として公私協働と学習に基づく共生活動の輪が限定された地域を越えて広がることを目指したものでなくてはならないということです。地域づくりの発信拠点になるべきだということです。

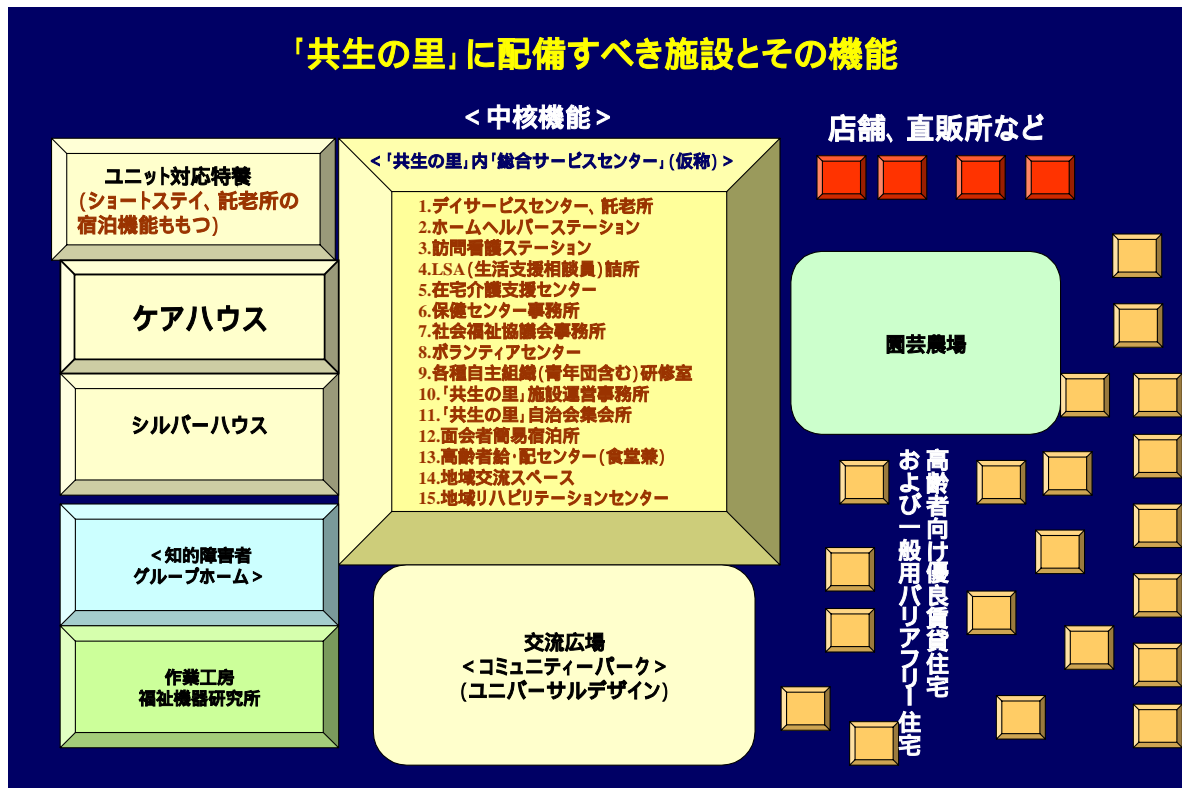
右図はイメージ図です。後で皆さんに、どういうものが必要かを話し合ってもらいますが、これにあまりこだわらなくてください。書いてある以外に、子育て支援の施設があってもいいかもしれませんし、多目的の保育所があってもいいかもしれません。これは皆さんで膨らませてください。



「共生の里」に配備すべき施設とその機能

次ページの図は、配備すべき施設です。ユニット対応特養を入れています。地域での住宅環境をつくっていくという場に、はたしてユニット対応特養を配備するというのは議論があるところだと思います。なぜ入れたかと言いますと、今の特養は50人いれば50人全員が同じような生活を送るわけで、それでいいのかということがあります。たとえ施設に入っても、その人が過ごしたいような生活や生活の場を形成するということを大切にしなければいけない。今日は散歩に行くとか、読書するとかいうことが可能なように、5~6人ぐらいの単位の小グループごとにケアをするような施設をユニット対応型特養と

言うわけです。五色町では特養が足りないので早くつくれという声がたくさんあります。つくるとすればこういうことに対応できる特養でしょう。そしてこういう特養であれば、山の中につくるのではなくて、他の高齢者が住んでいるところにつくり、そういう人たちと交流できるようにしていくことが大切ではないでしょうか。要するに、居住型の特養にしていくべきではないかということでここに入れたのです。



「共生の里」(仮称)運営のありかた(案)

多様な住宅が集めた居住環境の中を、どう運営していくか、どう支えていくかが非常に大事なことです。施設運営面、「共生の里」における各種ケア、生活支援事業を、民間、行政、社会福祉協議会、老人会、ボランティアの人たちが、どう参加しながら支えていくのか。サービス提供側の会議も必要ですし、入居者の自治会も必要でしょう。それをトータルしたものととして「共生の里」を全体として皆で支援していこう、つくっていこうという仕掛けが非常に大事だと思います。この仕掛けをうまくつくることによって、全国には無いエリアができてくるのだというふうに思います。

地域で支えあい地域で暮らす「共生の里」

「共生の里」のエリア内でのいろいろな活動があるでしょう。住民の方々が参加しながら、生きがいや自己実現の活動があるでしょう。そして安心づくりのためのいろいろな活動があると思います。日常的な健康管理とか訪問診察とか、あるいは緊急通報システムとか、いろいろな仕掛けを安心づくりのために組んでいく必要がありますし、その中で「共生の里」の環境保全とか園芸農場の指導だとか、住民の活動がたくさんあると思います。

「老後に至るまで安心して住みつけることができる」地域づくりの要件

一番目に包括的な地域ケアの体制が必要です。「共生の里」の運営は建物をつくっただけでは駄目です。保健・医療・福祉の連携・統合体制、包括医療に取り組む医療施設、障害者・高齢者の融合的ケアシステム・施設、子どもの頃からの健康づくりの取り組み・中高年の健康増進施設、急性期・維持期・心身機能保持増進リハ、公私協働体制、健康・福祉情報システムが無ければいけない。二番目に、住民の健康自己管理能力と地域福祉力の高揚とそのネットワークが必要でしょう。三番目に障害者・高齢者の地域生活と就労支援、四番目に介護家族の休養・健康管理支援、最後に各種安心居住環境。こ

れらが相まって老後に至るまで安心して住み続けることができるエリアが形づくられる。その一つとしての「共生の里」だということです。

以上で、基調報告を終わります。

3. 「共生の里」を考えるワークショップ

(1) 進行説明(野崎氏)

今日はテーマを4つに分けています。第1グループは「共生の里の施設について考える」で、モデル地域をつくる場合にどのようなものがあれば安心かということを考えていただきます。第2グループは「地域の参画のしかたを考える」で、五色町でいろいろな活動をしている人がどうやれば参加できるのかを考えます。第3グループは「どのようにアピールするかを考える」で、人を集めて町の活性化を図るためにモデルをどのようにアピールするかを考えます。第4グループは「だれでも暮らしやすい生活環境を考える」で、保健・医療・福祉の3つの環境をどう整えていくのかを議論していただきます。

今日は、皆さんに均等に意見を出していただくワークショップ形式を考えています。意見を付箋に書いていただき、それを整理していきます。今の五色町についてのご意見を、住民の方は黄色の付箋に、外部から来られた方はピンクの付箋に書いていただきます。次に五色町がこうなったらいいと思われることを同様に黄色とピンクで書いてください。その後、グループのテーマを中心に望ましいモデル地域のあり方を緑の付箋に書いていただきます。それぞれの意見をファシリテーターが整理して、最後に参加者からと専門家の方から発表をしていただきますので、よろしくお願いします。

(2) グループワーク(KJ方式)

各グループで出された意見は、12ページからのグループごとの一覧をご覧ください。

(3) 各グループ報告

<第1グループ> テーマ:「共生の里」の施設について考える

今ある施設では交通のアクセスが悪いことが一番多く出た問題点です。「共生の里」では交通のアクセスと、地域性を考えた一つのまちとしての考え方をしていく。二世帯・三世帯住宅を含め障害者の方も一緒に生活でき、なおかつプライバシーも守りながら開放性があるところというような意見が出ました。他に斎場の拡充の問題などの様々な問題が出ましたが、機会があれば見てください。交通の便が悪いということが一同にお話が出ていて、やはり交流とかが無かったということがあるかと思えます。多様性ということを含んだ一つのまちということが、テーマとして出てきたと思っています。

<第2グループ> テーマ:地域の参画のしかたを考える

高齢者のための足が不便、送迎サービス等はボランティアへの参加や文化的な生活のためには使えない、高齢者への施策やサービスは充実しているが教育・住宅への視点や自然環境への配慮が欠けているのではないかという意見が出ました。合併後は実現するのかという心配も出されました。町内会や隣保組織はしっかりしており地域での助け合いや情報交換はできているが、当のお年寄りにもっと力を発揮していただくということや、障害者にも配慮したものであってほしいという意見が出ました。今までは行政任せで住民の参加の意識が低く、様々な会が高齢化しているという中で、「共生の里」に参画するためには、住民活動のネットワークづくりと意識を高めていくことが大事です。生活の臭いがあるという脱施設化といったことが大事ではないかということだったと思います。最初から住民がいろいろな共同でつくりあげたものなので、参画というのは既にできているのだというコメントがあり、これからどう積み上げていくかということが大事だと思います。もう一つは、共生というのは高齢者だけでなく様々なグループと一緒にするということで、いろいろなグループの調整が必要という問題があるかと思えます。

<第3グループ> テーマ:どのようにアピールするかを考える

少子高齢化社会、家庭介護の弱体化という社会背景を考えていく中で、まずは五色町の中で「共生の里」の必要性を発信して皆さんに理解を求める。そのためには、町内広報やケーブルテレビ、いろいろな総会でも説明していかなければいけない。その上で、モデルルームのようなものをつくり、言葉以外でも内容を説明していく必要があります。年をとったから皆に介護してもらおうという考え方ではなく、お年寄りの方々が自分たちで支えあうという社会づくりが大事な時代に入ってきたように思います。そのためにはモデルルームは合併までに必ずということを強調したいと思います。

「共生の里」ができれば安心力が生まれ、日常の暮らしをととても豊かなものにするし、新しい活動・行動の道を開くのではないかというご意見があり、いいキーワードだと思いました。

<第4グループ> テーマ:だれでも暮らしやすい生活環境を考える

「共生の里」については今日の説明で少し分かりました。その中で、「それぞれの生き方を大切に」する視点が大切です。五色町はたくさんのボランティアの方がおられて恵まれています。男性の参加も考えていただければという意見がありました。ゆりかごから墓場までということで、保育と託老を一体にすればいいのではないかということも出ました。私は神戸と五色町を往復しており都会からの視点で、楽しく美しく暮らす工夫が必要だという意見です。老若男女の楽しい交流や、地元の食材でのスローフードを伝えていくことが出されました。映画館、プール、エコバスの要望もありました。私は、五色町にバラ公園をつくりバラで埋めつくしたいと考えています。

ボランティア団体を中心に、いかに発展していくかということも重要な点として考えていくことが必要だと思いました。それぞれの生き方を大切にするというのは重要な視点だと思うので、それを大切にしながら利便性との合意点を見出すためには、町と人々との議論がすごく大事だということです。

4. コメント&まとめ

グループごとの素晴らしいまとめをしていただき感謝しています。専門家として発言されていない方とギャラリー参加の方からのコメントと、小森先生からのまとめをお願いいたします。

(1) コメント

(専門家)参加者から一つのまちとして考えようという発言があり、これは実現できるなと思いました。この心を忘れずに一生懸命つくっていけばいいと思っています。

(専門家)町として非常に頑張っておられると思います。まちづくりは行政が引っ張っているところが多いのですが五色町は違うということと、住民の方はボランティアにも熱心ですし、意見も良く出るので、下からの盛り上がりもすごいと思いました。

いろいろな方から出たいろいろな意見をかき集めて「共生の里」ができればいいと思いました。

五色町では老人の障害を持った方には行き届いているのですが、壮年期の障害を持った方には地域参画が欠けている町で、家に閉じこもらざるを得ない状況にあるように感じています。先日、知的障害者のグループホーム菜の花の見学に行ったのですが、町中で近隣住民に支えられながら社会参加しているのが印象に残っています。こうしたまちづくりができていけばいいと思います。

(2) まとめ(小森氏)

大変活発で楽しいお話を聞かせていただきました。まとめは必要ないと思うのですが、2 つほど気がついたことを申し上げたいと思います。

一つは、NPO とボランティアは同じような仕事をしていますがどこが違うのでしょうか。ボランティアは基本的には個人の集まりで、いつでも参加でき、一人でも参加できます。NPO は基本的には組織として永続的に仕事をしています。そういう違いがあり、地域での活動をしていくのにはボランティアだけでは足りない面があります。一昨日、NPO への貸付の審査をしました。宝塚で古い家を借りて改造

して老人のためのディケアの施設をつくる NPO へ 300 万円をお貸しすることを決めました。何億円も使って新しく作るだけではなく、空いている施設や学校、人が住んでいない家を改修してそうした施設をつくっていく。行政では一定レベル以下のものは法律で縛られてできませんが、民間ならできるというものもたくさんあるわけです。先ほどお話を伺っていて、どうしても最後はつくれ、お金をという話になりがちです。五色町は裕福のようではありますが、現実には行政は今大変な状況です。この先、本当に年金や保険がどうなるかという問題を抱えて、行政だけが先頭に立ってという時代ではありません。もちろん民間に任せれば、金持ちの老人には住みやすいが、お金の無い人にはゆかりも無い金儲けの施設ができないとも限りません。それでは困るわけですから、今日のように住民や専門家の方々の知恵と力をどうやって集めるかということが大きな問題になるのではないのでしょうか。このワークショップも県内各地を回って、そういう動きをできるだけ盛り上げてお助けするというで始めました。

もう一つは、箱をつくれればそれで済むのかということです。「共生の里」の構想は大変立派で、本当に楽しみです。しかし、それができれば問題は終わりということにはならないのです。今までは障害を持つ人やお年寄り是在宅か施設かのどちらかしか無かったわけですが、兵庫県住宅審議会では、そういう従来の住宅と福祉の枠を超えて、その中間が必要であると話しています。実は但馬の方では、お年寄りが山の中の雪の深いところに一人で住んでいたらどうにもならなので、冬の間だけでも一緒に住めるようにということが現実のものとして出てきています。障害を持つ人やお年寄りがまちの中で地域の人と溶け合うような形にまちを変えていき、家族なり近所の人と一緒に暮らしていく。まさに共生です。そのためには、「共生の里」を箱だと捉えるのはちょっと狭いと思うのです。「共生の里」すなわち五色というようにしていかなければという気がします。私は、最後は田舎で暮らしたいと思っていますが、年をとり車に乗れなくなる、あるいは仕事で神戸に通えなくなればどうするのかと、一番に健康の問題を考えました。もう一つは、建てた家が次の代まできちんと売れるような家でなければいけない。ですから、あまり辺鄙なところとか、私の好みで建てるとかでは困るわけです。そういう点で五色はすでに、今日も何人が来られています、大都市から移り住んだ方々がおられます。また、大都市に住んでいる団塊の世代の人たちが 3 千万人いると言われていています。そういう方々が終の棲家として安心して安全に暮らせるまちを目指すのが、まちの一番の振興策ではないかと思っています。

今日お手伝いしてくれたファシリテーターの 4 人は、ご覧のように非常に若くて明るくて、ものが言いやすい。こういう方々がいたからこそグループワークが楽しくできたのだと思います。ファシリテーターの皆さんに、ぜひ拍手を送っていただきたいと思います。(拍手)

5. 閉会(倉内氏)

冒頭の小森先生のお話に地引網を曳くのだということがありました。瀬戸内は魚が減っており大漁というわけにはいきませんが、本日の地引網は非常に大漁であったと喜んでいるところです。秋がすっかり深まってきたように、「共生の里」についてもご理解が深まったのではないかと思います。

今日の内容は、神戸まちづくり研究所でまとめていただく予定です。そして皆様から寄せられたご意見やご要望を、町として策定作業中の基本計画に早急に肉付けをしたいと思っています。先ほど「共生の里」プロジェクトについて、まずは町内から発信すべきではないかというご意見、またできるだけ早急に実現するようにと叱咤激励を受け、担当として非常にプレッシャーを感じています。全国に類を見ない、全国に発信できる素晴らしいプロジェクトになるようにできる限りの努力をしたいと思っています。

本日は時間も若干オーバーしまして恐縮いたしております。これをもちまして、「兵庫まちづくりプラットフォーム」ワークショップ in 五色 を閉じさせていただきます。ご協力、ありがとうございました。

こんなとこ変えたい！

共生の里を！ こうなったらいいのに！

ひとつの町として考えよう！

**交通の便が悪い 利便性悪い
高台、坂道、分散**

- ・施設が高台にある
- ・健康村と云メルヘンチックな村ですが、診療所へ行くにも簡単に行けません。交通弱者のことも考え頂きたい。
- ・坂道が多いので、施設等の建設場所を考えて
- ・各施設が分散している
- ・ウェルネスパークと云う立派な公園があります。老人、子供、簡単に行けず、行くにも交通機関がなければ気楽に行けません。之等の事どうお考えなのでしょう。
- ・車がないと生活できない所なので、交通（福祉タクシー、乗合バス）等の整備
- ・通院には便利な様に、交通の便を考えてほしい!!!
- ・地区にこだわっている。
- ・診療所などに行きたくても交通の便が悪い。
- ・歩道のない道路が多いので、遊歩道の整備を
- ・サルビアの入居者の人を、公園とかにつれて行ってあげる公園とかが近くにあればいい。
- ・共生の里の場所として、利便性・安全性のあるフラットな用地
- ・もっと町のなかにあった方がいいのでは。

もっと活用を！

- ・各町内会にあるふるさとセンターやコミュニティセンターなど、殆んど使っていない現状です。そこを使うことによって近くで利用できたらよい（一人暮らし老人や在宅老人）
- ・各町内会にある集会場を、もう少し活用出来たら良いと思います。
- ・学校、集会所等の活用

- ・一つの町として考える必要がある
- ・“ふるさと性” “地域性” “自然性” をどう生かすか

様々な規模

施設の規模を小さくする
小さい施設を複数

アクセスよく

- ・アクセスの容易な施設
- ・人の動き 動線 交通の支援方法 ミニバス、ミニタクシーetc
- ・公共依存型でなく、みんなが有料ボランティア運転手 福祉ボランティアタクシー

リハビリ、体づくり、プールを！

健康寿命を延ばすに島(海)を生かした施設 海水温水プール、リハビリ、健康増進タラソセラピー

- ・健康の町と云う事ですが、一番近くに体力をつけます。プールが出来ますのを早く望みます
- ・温水プールがほしい。リハビリには必要。(場所を考えてほしい)

開放性

開放的な施設 (地域住民とのふれあい)

閉鎖性

“閉ざされた施設”(生活施設の場合)生活施設は家なので、開かれた施設ではなく閉かれた地域が必要

自然

共生の郷は大変に待ち致していますが、自然が破戒されるのでは?又、出来上がった時にそれにたずさわの方々年代が気になります。

**障害者・老人の方々と
の共生・交流**

- ・障害者のグループホームを作ってほしい。高齢者との交流も必要
- ・障害者もお年寄りと一緒に生活できるような施設が望ましい
- ・障害を有する方との共同生活

施設の拡大を！

- ・診療所**全部**の拡張
- ・いまは狭い
- ・サルビア老人ホーム入居者の増大

施設と住宅のスキマ

施設と住宅のスキマを埋める自由度のある施設

- ・健康増進施設(タラソセラピー等で)国民保険、介護保険の軽減化
- ・緑豊かな山や海も資産 - いやしの空間確保出来る場所に施設配置

規模

施設の規模が大きいのでは(精光園とか)サルビアも

多様性

様々な希望にそえるもの

住民参加の可能性

住民でつくっていく 未完の建物で可能性はある

お葬式もできる斎場も！

老人介護の時代で自宅での葬儀が大変である。葬儀場でお通夜も葬儀ができるとよい。

多様なすまい方

- ・二世帯・三世帯住宅も併設する
- ・多くの人が集える施設が必要(商店、ゲームセンター、居酒屋...)
- ・共生の施設内容及び施設
老人相互 老若相互
若人相互 障害・老人(若)相互
~ 共存するまち

1 班

施設を考える！

奥井、原田、窪田
長谷部、山本、松浦
溝淵、濱田、磯部
佐野、來馬、松原

給食

- ・栄養管理不足が病になる。独居老人対応給食センター(サービス体制づくり)
- ・老後ひとり暮らしの不安・安心対策として **バリアフリーの賃貸集合住宅(ケア付)**

ネットワーク

- ・老人及び子供たちの交流体制づくり(公会堂、防災センターなど)
- ・町を囲むような遊歩道、サイクリングコース、ジョギングコース、花街道等の併設
- ・理想と現実との異りはどの程度かと考えます

農園や作業所も

- ・都志・鮎原・広原・鳥飼・堺などの地区ネットワーク 洲本・淡路をにらんで広い小山の連続の地で 交流のため
- ・住環境を考えて出来るだけそれぞれが好きなことが出来るような農園や花壇、趣味を生かして生活できるようなもの
- ・共生の里 公園を作ってほしい 老人が花を世話できる様な花だんがあれば良い
- ・共生の里を作るにあたり、集団の部屋又1人部屋を作って自由になれる時間を作ることが出来る様に
- ・作業所、農園も必要ではないかな?
- ・生産活動を行える施設(農業等)

地域の参画のしかたを考える

教育・住宅への視点も

総合的ケアの中に、教育・住宅も入れるべき

合併後は？

- ・合併を前にして本当に共生の里は実現するのか
- ・町村合併した場合、健康と福祉の「包括的ケア」が継続されるのか？

五色町発で全淡路に発信することが大切（合併に負けない）

病院の老人ホーム化

病院の老人H化

高齢者の実力を発揮

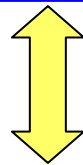
- ・高齢者の実力を発揮せねば！ えんりょは美德でなし
- ・何人かで集まれば可能になるのでは？
- ・個人個人が老後計画を企ててない。老後生活の調査が生活全般に亘って必要
- ・農業ボランティアの中で畑作の後継者がなく、荒廃していく田畑が増加している
- ・新しい価値観の創造
核家族社会

住民参加の意識が低い

住民参加の意識が低い（行政まかせ）

自然環境への配慮を

- ・川が汚い。昔は川をもっと大切にしていた。
- ・共生の里の中に、自然環境等の学習（地域の住民・子供）出来るように



住民活動のネットワークづくり

共生の里の生活を、どうフォローしていくかが大事

住民の活動がうまくネットワークされる必要がある

高齢者のための足は...

- ・町内巡りの交通の便
- ・交通の便が悪い。特に高齢者には

さまざまな活動をする中で移動することが大変そうにみえます。活動の前提になる「足」はどうなっていますか？

地域どうしのつながりを

- ・町内会などは、ボランティア活動につながっていますか？
- ・ボランティアで運営を担う枠組み（NPO 法人）が必要では
- ・行政など関係者の考え方に流されず、住民サイドの考え方を重視するには NPO のたちあげが必要。住民のニーズに答えられない。
- ・「地区」どうしのつながりはあまりない...
- ・各隣保組織はしっかりしている
- ・情報交換もやっている

障害者にも対応を

- ・障害者の就労機会
- ・障害者施設の拠点づくり
- ・障害者にも対応した“共生の里”を
- ・健全者と障害者が支え合う

「会」メンバーの高齢化

色々な会が皆高齢化しつつあるが、若い人は皆忙しい。それなら老人が元気であるしか

2 班

佐山、新家、池田、土屋、森本、金谷、十川、フंक、野崎、田中

3 班 どのようにアピールするのか ~ 共生の里を考える

モデル発信!!

町内、家族、友人と話して

毎月発行している町内会向けの広報で内容を発表する

- ・家族で話し合う
- ・人と話す時に、共生の里の話題をだす

目と耳での情報

- ・CATVを使って、共生の里のイメージ他を発信する
- ・目より耳にて伝える。広報より良いと思う。ACT

インターネットで発信する

外部の人にはイメージまでしか伝っていない

- ・形になった「情報」知らない
- ・ダンジキ道場なら知っている
- ・何やら動いているらしいーと。
- ・健康に力を入れている町

受ける人のことを考えないと

デジタルディバイド (情報格差をなくす) 恩恵享受する人できない人

いろんな団体への呼びかけ

- ・町内会だより、班長会、仏教行事の利用
- ・NPOの月例会を通じて、会員等あるいは会員の友人・知人にPR及び仲間に誘っている。
- ・社協「しあわせ」発行
- ・各種グループ活動の利用(畜産)

ボランティア団体と勉強会を実施する

モデルをつくろう

まず モデル的? ムの? モデル的なものをつくる
共生の里の小さくてもよいからモデル的なものを早く創ること

提案

法事を利用しては

法事の利用

アピールイメージを

- ・一ツの目安として安心意をあそえる、高齢者に対して
- ・共生の里のしくみ意義

でも実際は...?

高齢者に情報は届いている?

情報が届いているのか心配、高齢者に...

行政にも作る意思をもっと

- ・行政が作らないといけないうい意思が少ないのが問題
- ・町議としては現実問題として予算措置に努力している。今非常に合併前で正念場を迎え奮闘中です。

高齢へのアピール

- ・高齢者へのアピールをもっと (イメージを伝える、わかりやすさ)
- ・老人にしばらくこんで知らせる

社会福祉協議会も

社会福祉協議会にもっとPR

メンバー
小道、中田、上木
山口、原、多田
和田、中川

今やっていること
今の課題
これからの提案

4班 だれでも暮らしやすい生活環境について

共生の里について 少しわかった

- ・共生の里という言葉は何年か前に聞いた事があり、先生の話聞いて少し分かったような気がします
- ・介護保険料は安く、ケアは厚くと云う所、そのための手立てがよくわかりました。
- ・五色町では、ディサービスや入所されている人達は恵まれていると思う（食事とか介護面で）

ボランティアを活用しよう

個人の考え方を大切に

一人一人の生き方を重要視しながらの“共生”は可能だと思います。でも利便性は“不便さ”も伴うことも多々あります。その合意点の議論が重要でしょうか。

たくさんのボランティアがいる

私達の町はボランティアの人が多く、共生の里が出来た時に閉じこもりの人をお誘いの手伝いができるといいのですが...

現在あるボランティア団体等を中心に発展していく事が重要と考えます

男性も参加して

五色町はボランティア活動のすすんだ素晴らしい土地柄だと思います。でも、もしかしたら「福祉」という視点では女性中心になりがちなのでは？男性の役割は？

↓ その中でも

「それぞれの生き方を大切に」視点が大切

保育、宅老などを一体に

- ・宅児所、宅老所等あれば介護の方も助かるのではないかな
- ・“共生の里”は町民全員のものです。乳児から高齢者まで女性も男性も巻き込んで「福祉」を創り上げましょう！
- ・学童、青少年への健康教室
- ・保育園や学童保育所と隣接した宅老所を作って欲しい

ゆりかごから墓場まで

ゆりかごから墓場まで

- ・乳児 高齢者 } ライフサイクルが重要。子供から大人までのボランティア環境
- ・独居老人のためのボランティア等ある様ですが、「育児支援」は地域ぐるみで行われているのでしょうか。 ある

「コミュニケーション」がスタート

ベンチ等、話し合い出来る様に多くそなえつける。コミュニケーション。
きやすく声かけられるまち

楽しく暮らさないとい！

- ・好きな事がみつきり、それが出来る
- ・サポートが大切
- ・老若男女の楽しい交流
- ・美しく楽しく暮らすことの工夫
- ・難つかしくは「人生の美学」
- ・おいしく値段の安い食堂がある
- ・スローフードの発想、食生活の改善。美味しく、美しく食を楽しむ。「母親の役目が重要」
- ・映画館あったらいいが...
- ・会議室を転用できればよい（立派なイス）

- ・一人一人が生きてきた生き方がつぶされない住い方が出来る
- ・生活環境を変えずに暮らしていければよい

参加者 森本、平山
上田、榎本、樹下
佐藤、森本、山口
山路、松本、山本

地域の文化度を上げる「バラ」を

- ・みんなでバラを育てるし、特に老人の方々がバラの花を育てることに生きがいを感じる
- ・五色町の町をバラの花で埋めつくす（バラ公園）。町の文化度をあげる

コミュニティバス

巡回
エコバス

プールも
あるとい
いなあ！

町内一周バス！

- ・共生の郷 出発点として町内一周の巡回バスを走らせてもらいたい
- ・エコバス
- ・だれでも自由に利用できる送迎バスがあればいいなと思う
- ・町内巡回バスを

映画館

すわりごちのよい「いす」が整備され、映画館にもな講義室があったらよいのでは

「兵庫まちづくりプラットフォーム」

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通 4 丁目 1 番 6 号

神戸市生涯学習支援センター北棟 3 階

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所内

TEL : 078-230-8511 FAX : 078-230-8512

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp

Homepage = <http://www.netkobe.gr.jp/machiken/>

本冊子の一部または全部を無断で複写、転載することを禁じます。